

日本の文化的景観

平成一七年四月一日の改正文化財保護法施行により、文化的景観が新たに文化財に位置づけられ、保護を図る制度が確立されました。では、文化的景観とはどのようなものなのでしょうか。法的には、「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの」（文化財保護法第二条第一項第五号）と定義されています。

法施行に先立って、平成一六年度より二か



稲美のため池群



宇和島の段々畑

年計画で「文化的景観の保存・活用事業（モデル事業）」が全国九か所を対象に実施されました。今号ではそれぞれの文化的景観モデル事業実施地区を紹介し、文化的景観の事例を知ってもらおうと思います。

○稲美のため池群（兵庫県加古郡稲美町）

播磨平野の南東部に位置する稲美町は、年間総雨量が約一〇〇mmと少なく、加えて台地上に位置することから、昔から乏水地でした。この地で農業を営むためにため池や水路の築造が営々と行われ、昭和三〇年代には一四〇か所のため池が数えられました。現在は残存する八九か所のため池群を中心に、水路、水田、集落などが一体となり、独特の文化的景観を形成しています。

○宇和島の段々畑（愛媛県宇和島市）

愛媛県南西部のリアス式海岸地帯に位置する宇和島市遊子水荷浦では、傾斜三〇〜四〇度の急勾配地に二〇〇段以上もの段々畑が三ha弱の規模で営まれています。半農半漁という生活様式の中、一七世紀の藩政による新浦

開発から段々畑の築造は始まったとされますが、現在、周辺の柑橘類の畑、山林、社寺境内地、集落、漁港等が、眼下の藍青色の海面に幾何学的に浮かぶ百数十もの白色の養殖筏ともあいまって、独特の文化的景観を成しています。

○大谷石（採石場）の景観（栃木県宇都宮市）

宇都宮中心市街地の北西部に位置する大谷地区では、平坦な台地のところどころに凝灰岩の岩山が屹立しています。古墳の石室や磨崖仏、宇都宮城御用石などに古くから利用されてきた大谷石は、特に近代になると建築用材としての需要が高まり採掘産業が発達しました。自然岩と幾何学的に残る採掘跡が混在し、また採掘場周辺には石工町や大谷石造りの建造物が展開するなど、独特の文化的景観を形成しています。

○大山の千枚田（千葉県鴨川市）

大山の千枚田は鴨川の源流に程近い地域に位置し、南東の斜面に東西約三〇〇m、南北約一五〇m、面積約二・一haにわたって広がっています。畦畔はすべて土坡で形成されており、三七五枚の水田が天水のみによって耕作されています。慶長以前に造成されたといわれる大山の千枚田は、周囲の里山や集落とさまざまなかたちで有機的につながりながら維持されてきた独特の文化的景観です。

○北山杉の林業景観（京都府京都市）

に幾重にも堀をめぐらせて、現在柳川市街地に展開する堀割の骨格をつくりました。また、水田地帯にも水路が張りめぐらされており、水とかかわり合いながら育まれてきた独特の文化的景観が展開しています。

○蔵野の棚田（佐賀県唐津市）

唐津市相知町の南端、八幡岳（標高七六四m）のふもと急傾斜地に位置する蔵野地区では、山の谷間を昭和初期まで開墾しながら拡大された石積み棚田が一〇五〇枚、四〇haの面積で広がっています。棚田に民家がないたため生活雑排水が田に入らず、また平坦地に比べ昼夜の寒暖差が大きいため、稲が時間をかけて登熟され良米が生産されます。集落に残る、「ツカ」と呼ばれる高さ数mもの防風石垣や石積み暗渠も含めて、独特の文化的景観が一体となって展開しています。

●重要文化的景観「近江八幡の水郷」

（滋賀県近江八幡市）

琵琶湖の東岸に位置する近江八幡では、内湖や水路が展開し豊かな湿地生態系が形成されています。湖上水運により流通が活発であったため、近世より在郷町が発達しました。また水辺周辺にはヨシ原が広がっており、ヨシの管理や加工といった伝統的産業は今も受け継がれています。ヨシ産業などの生業や、内湖と共生する地域住民の生活と深く結びついて維持・再生を繰り返しながら独特の発展を遂げた文化的景観であり、本年一月二六日には国で第一号の重要文化的景観に選定されました。

近江八幡の事例の場合、「安土・近江八幡の水郷景観」という名称でモデル事業を実施していました。以前からあった景観保護の取組や景観を守る条例に加え、昨年三月に景観行政団体になり、条例策定や所有者等の同意取得など諸条件が整ったため重要文化的景観選定の申出が行われ、平成一八年一月二六日に選定されました。他の八か所も引き続き文化的景観保護の取組は継続され、最終的に選定の申出がなれることが望まれます。

次号から、モデル事業実施地区を中心に、それぞれの文化的景観について詳しく紹介します。

（文化財部記念物課文化的景観部門 鈴木地平）



蔵野の棚田



安土・近江の水郷景観

表 稲美町の概要

稲美町域面積	34.96km ²	
海拔（最高位）	92.2 m	
海拔（最低位）	22.3 m	
市街化区域	3.21km ²	(9%)
市街化調整区域	31.75km ²	(91%)
農地	17.09km ²	(49%)
宅地	5.81km ²	(17%)
山林	1.14km ²	(3%)
雑種地等	10.92km ²	(31%)
うち ため池	89 か所・4.1km ²	(11.7%)



稲美町全図

昭和三十七年（一九六二）の稲美町全図には、一四三か所のため池が確認できます。自然条件との先人たちのかわりが、この地域で生きていく人たちの知恵が、今のようなため池が多いという独特な農村風景を形づくり、育んだといえます。

かつての水が乏しい台地上の「野」は、人がかわって水路、ため池、田畑、集落を拡大させたが、時代とともに全体として都市化の方向にあります。しかし今も、国営東播用水事業による用水とともにいなみ野の地域農業を、生活を支えている仕組みがあり、ここに住むことに決心した人たちに安心を与えています。また、台地に生きる人々が築いたため池を中心とした独特な風景は、ここで生きている人々とともに生きています。

（稲美町教育委員会教育政策部文化財担当 岸本一幸）

江戸期にはため池の築造制限もあって、水争いが繰り返され、さらに早魃が開墾者たちの生活を苦しめました。この状況を改善するための新たな水源確保の試み（疏水事業）は、明治十九年（一八八六）になって今の稲美町を中心に二一村が加古川の上流の河川からの疏水路建設のための水利土功組合を組織して測量を開始。淡河川からの疏水事業を二四年に完成。これによつ

近代の水利形態と疏水が形づくった風景

するとという願いは、特に、兵庫県が成立した後の明治から大正にかけて進められた淡河川と山田川に取水源を求めた疏水事業によつて実現され、この地域の風景を稲作地帯のそれに変貌させました。

分の八度の傾斜地形の中にあります。初めて訪れた人の多くは、今の位置を確かめるような目印になるものがなく、「野」の真ん中にいるように感じて、道に迷うことがあると聞いています。暗くなるともつと条件は悪くなります。夜半には車の前をキツネが駆け、朝にはタヌキが事故に遭って道路脇に横たわることもありま

全体として起伏に乏しい台地で、気候は瀬戸内式気候に属し、河川も小規模で水も乏しいという過酷な自然環境が広がる「野」なのです。

古代のいなみ野 文学的・歴史的空間

「いなみ野」という表記は、『万葉集』に残されています。家にして 吾は恋ひむな 印南野の浅茅が上に 照りし月夜を（巻七 一一七九）

また、『続日本紀』の聖武天皇の神亀三年

て隠道二八か所、ため池二七か所、サイフォン工法一か所（全長七五・一m、九六cmの送水鉄管、落差二・五m）が完成し、新たに七〇〇ha余りの水田ができ、約一八〇〇haが灌漑されることになりました。

しかし、これだけでは用水確保と水田拡大への地域要望は満たされなかったため、四四年には山田川疏水工事に着手して、大正八年に完成。またこの工事で、六二か所のため池を設けて、八五〇haほどが新たに水田化されました。これが、淡河川・山田川疏水事業で、この疏水事業の受益範囲は、古代にいなみ野と呼んでいた範囲にはほぼ重なるものです。

しかし、ここでも取水する時期は限られていたため、非灌漑期にできるだけ多くの用水を確保するために、新しくため池を築いたり、規模を大きくする必要がありました。



稲美町空撮（印南地区）



南池（稲美町印南）



広がる水田（草谷）

分の八度の傾斜地形の中にあります。初めて訪れた人の多くは、今の位置を確かめるような目印になるものがなく、「野」の真ん中にいるように感じて、道に迷うことがあると聞いています。暗くなるともつと条件は悪くなります。夜半には車の前をキツネが駆け、朝にはタヌキが事故に遭って道路脇に横たわることもありま

全体として起伏に乏しい台地で、気候は瀬戸内式気候に属し、河川も小規模で水も乏しいという過酷な自然環境が広がる「野」なのです。

古代のいなみ野 文学的・歴史的空間

「いなみ野」という表記は、『万葉集』に残されています。家にして 吾は恋ひむな 印南野の浅茅が上に 照りし月夜を（巻七 一一七九）

また、『続日本紀』の聖武天皇の神亀三年

（七二六）の播磨国印南野行幸の記録や「播磨国風土記」の記述にもこのあたりの風景をかいま見ることが出来ます。

中世近世の印南野 野を生活空間に

町内の特定の場所でも中世期の土器を採取することが出来ます。草谷川の南岸。野寺の高蘭寺周辺。愛宕山の南北にある琴池と千波池。天満神社が位置する国安。天満大池とその下流域の沖積平野。

稲美町には四本の河川があり、いずれの周辺も、前述のように中世を中心にそれ以前の土器が採取されている場所でもあるのに加えて、旧村である八か村の区域を重ねると、この地域の生活には欠かせない水をためるため池の築造と集落の拡大を、そして生活しにくい「いなみ野」に分け入った人々の足跡を、明らかにできるのではないかと考えています。近世になると古地図が残っています。

延宝四年（一六七六）の「西条組絵図」では、今の稲美町内にあった四〇か所ほどのため池と旧村と加古新村などが描かれていて、兵庫県下最大のため池になる加古大池（四九ha）も新村の東端に築かれ、その西側には新田が広がり、既にこの時期にこの地域の風景はできあがっていたと想像できます。

水に乏しいこの地に生きながらも米を作りたかった人々がいなみ野台地への用水を確保

台地とため池にいきる

明石市と加古川市の間で、海からは四㎞足らずに位置する「稲美町」の町名は、古来、この地域を含む一帯が「いなみ野」と呼ばれていたことなどによります。

「野」の風景

この「いなみ野」の範囲は、東の明石川と西の加古川、北の美の川に囲まれ、南西方向に緩やかに傾斜している台地状の一帯で、稲美町はその「野」ほぼ中央部に位置していて、町内の風景を構成する田、水路、ため池、民家、森などは東から西へ向かって約一〇〇〇

海と山とを耕してきた浦
遊子水荷浦

水荷浦の位置とその環境

遊子水荷浦のある宇和島市は、愛媛県南西部の四国と九州を隔てる豊後水道に面するところに位置し、県庁所在地の松山市からはＪＲ予讃線で約一時間二〇分の距離にあります。そして水荷浦は、市西部沿岸にある三浦半島の遊子地区の最北部に位置しています。市街地から自動車で四〇分、高速船で二〇分となります。

水荷浦地区は海岸線から一氣に三〇〇〜四〇〇度の急斜面が続いており、水源となりうる河川や居住空間としての平地といえるようなものはほとんど見当たりません。あわせて年間降水量が少なく、冬の北西季節風が強いときには「南国」とはいえないほど日本海側の冬の気象と似た現象がたびたび起こり、人間が生活していくうえではかなり苛酷な環境といえます。にもかかわらず、集落が成り立っているのは、全国屈指のリニア式海岸地帯にあり、黒潮が流れ込む漁場としての豊かな海が広がっているからなのです。

水荷浦の歴史と 半漁半農のライフスタイル

水荷浦の成立は、一七世紀藩政による新浦開発にさかのぼるとされています。食糧確保のために畑の開墾を始め、明治以降は養蚕業で栄え、昭和恐慌に繭の価格が暴落すると巻き網漁と国策によるサツマイモ作りに移行して難をしのぎ、昭和二十七年のサツマイモ暴落に際しては早堀ジャガイモの栽培に切り替え、その後の暴落においては養殖業に乗り出して、集落存亡の危機を幾度も乗り越えてきたたく



写真1 段畑の収穫：眼下に豊かな漁場である宇和海が広がっている
【撮影：石崎幸治】



写真2 今年の第6回ふるさとだんだん
祭りの模様
【写真提供：宇和島市教育委員会】

ましい歴史をもっています。

生業の盛衰や時勢と呼応しつつ、地区共存、助け合いの精神を保ちながら、半農半漁というライフスタイルが江戸初期から昭和三〇年代まで続きましたが、昭和四〇年代以降、個人経営による真珠やハマチの養殖業の競争により地区共存の意識は次第に薄れていき、現在は、海に出る若年層と山（畑）を利用する中高年層に完全に分かれてしまい、世代間で異なった生活様式・生業形態が併存しているのが現状です。

段畑と文化的景觀

写真2 今年の第6回ふるさとだんだん祭りの模様
【写真提供：宇和島市教育委員会】

地元では、段々畑のことを段畑と略称する人が大半を占めます。段畑は幕末期の人口増加と相まって食糧確保のためにさかんに開かれようになったとされていますが、当時は現在のような石垣はまだなく、築かれるようになったのは明治以降養蚕に伴う桑栽培からといわれています。養殖により経済的豊かさが得られるようになると、半農半漁の生業形態は変化し、段畑は老人たちの隠居場や精神的なよりどころと位置づけられるようになり、近年は養殖業の低迷が続いていることも相まって、山に返る斜面が広がってきてはいますが、「遊子水荷浦の段畑」は、1m程度の

高さの段垣が海際から尾根筋に至る斜面一面に 3ha 弱の規模で営まれ、海や集落とかかわり合いをもちながら、失われつつある半農半漁の生態形態を色濃く残す文化的景観といえます。

地元では遊子地区のシンボルである水荷浦の段畑を後世に残していこうという考えから、平成一二年十一月に「段畑を守ろう会」が設



--- 文化的景觀区域(景觀計畫区域)案
☐ 段烟



写真3 昭和42年ごろの水荷浦
【撮影：早見萬之助】

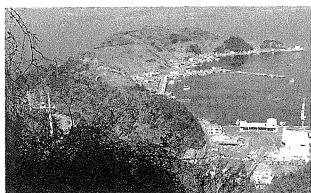
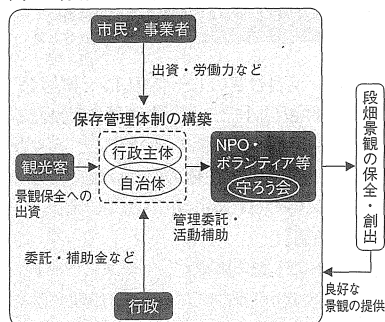


写真4 写真3と同アングルで撮影した現在の水荷浦【撮影：新居稔章】

图2 保存・活用体制案



立されました。行政の資金協力（国庫金額補助の市町村緊急地域雇用対策事業）により、平成二年度には二六・a（事業費五〇〇万円）、平成一四年度には二〇・a（事業費四三万円）の荒地を回復し、現在同会の会員が耕作を行っています。また、種芋一〇kg 二五〇〇〇円で、収穫までは会員がすべてを引き受け、収穫だけをオーナーが行うオーナー制を導入しており、現在は九名のオーナーがいます。

また平成一三年四月より、ジャガイモの収穫祭として「だんだん祭り」（ありがたうの方言の「だんだん」と、段々畑の「だんだん」を

かけて）を毎年開催しており、これはさらに昨年からは遊子地区のお祭りとして実施し、今年は四月二三日（日）に催して約三〇〇人の来客ににぎわいました。

また委員会の調査・研究を受け持った研究者の方々が地区住民と積極的にかかわり合いをもちながら歴史・民俗・地域資源などの調査を行ったところ、地区住民、特に耕作者の方々の意識向上につながり、文化的景観の保護による地域活性化等の方策を自発的に模索するまでに至っています。その一方で、行政と地区（自治会）との連携不足や行政が十分な地区説明等を怠つたため、本事業へ参加する地区住民に片寄りが生じていましたが、現在、なんとか地区全体として、この段畑風景を残す方法を模索する段階にこぎつけ、行政と住民がようやく一体となつて、まずは重要な文化的景観の選定を目指し、その後の地区の活性化を模索し始めています。

(宇和島市教育委員会文化課学芸員 廣瀬岳志)

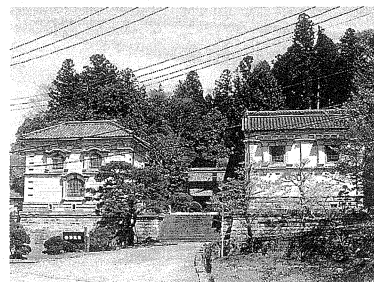
石の里に生きる

「大谷石」を産出する大谷は、JR宇都宮駅から北西約8kmに位置し、多くの観光客が訪れる宇都宮の観光地です。平坦な台地上に凝灰岩の奇岩群が連なり、独特の景観が形成されていることから、「関東の耶馬溪」や「陸の松島」などと呼ばれています。

その中心には、平安時代に創建されたと伝えられる坂東三十三観音十九番札所である大谷寺があります。奈良時代から鎌倉時代に岩陰に刻まれ、国の重要文化財と特別史跡の二重指定を受けている磨崖仏は、現在でも人々の信仰を集めています。磨崖仏の保存修理と併せて行われた岩陰内部の発掘調査では、縄文早期の人骨や土器などが発見されており、古代からの大谷における人間と石のかかわりをうかがいしることが出来ます。



昭和初期の大谷石搬出



大谷石建造物

石材産業の発達

大谷石の産出地付近は、石の切り出しや運搬が比較的容易な場所であったことに併せ、大谷石が加工しやすいこともあり、昔から建築・土木資材などに用いられ、江戸時代には宇都宮市の東部を流れる鬼怒川の水運を利用し、江戸に出荷されていました。明治時代に入ると本格的に産業として発達し、「大谷石」の名

で商品化され全国へ出荷されていきました。大谷石の名を全国に広めた要因として、旧帝國ホテル（東京）に用いられたことが挙げられます。完成の翌年大正一二年に見舞われた関東大震災において、被害が少なかったことから、大谷石がもつ耐火性等が脚光を浴び、飛躍的に需用が高まりました。このため、採石場と駅を結ぶ軌道が敷設され、多い日には一〇〇台を超えるトラックが連なり、集積場のある駅から、全国各地に出荷されました。特に京浜地区では、都市の広がりに伴い、建築物の外壁や石塀、宅地の土留めなどに用いられ、全体出荷量の約七割を占めていました。

文化的景観の特性

大谷では採石場を「山」と呼び、産業の発

達に伴って組織化が図られると、「山」の所有者である「山主」を中心に、販売を手がける「問屋」も生産地の近くに事務所や居宅を構えるようになりまし

た。石工などの労働者も近辺に住み、労働者を対象とした購買部などが設けられ、徐々に町がたちづくられて採石場周辺を囲むように石材加工場や農家が点在する小規模な循環型の地域に発展していきました。昭和四〇年代までは採掘は手作業により行われ、山の頂上から切り出す露天掘りと呼ばれる採掘が行われており、切断面が連続する景観が形成されていきました。採石量の増加により、良質な大谷石の採石場はそれまでの地表面から、地下へと移り最盛期には昼夜を問わず作業が行われていました。賃金は老若男女に関係なく作業量に応じた出来高払いで、男性は採石や運搬、女性はコッパと呼ばれる採石クズの掃除や運搬を行いま

した。運び出されたコッパは、石山などにすり付けられ、徐々に独特の景観が造り出されていきました。また、石材の加工技術も向上し、石材業者は優れた技能をもつ石工により、独特の意匠を施した大谷石造の建築物を建築し、石材業により繁栄した大谷の象徴としてその名

を残をとどめています。大谷石は地域の人々の生活の中にも用いられ、井戸枠やカマド、火鉢などに加工され、出荷ができない大谷石は宅地や農地の土留めに用いられ、独特の農村景観が形成されています。採掘に関する独特な行事や習慣は現在も伝えられています。その一つに毎月二五日に行われる「山の神」があります。これは「山」とに行われる風習で、山主と作業員が作業の安全を山の神に祈願するとともに、昼夜を問わず採石に従事していた作業員の安息日でもありました。

夏には奇岩群や採石場が草木で覆われ景観が隠れてしまうことから、草木を除去する岩出し作業が行われ、秋には地域を紹介するイベントの開催など、石の町大谷の魅力を引き出すような取組も行われています。現在大谷の再生に向けて、行政、学術経験者、市民団体等が幅広い視点から検討を重ね、古来より人間と石のかかわりによって造られてきた大谷にあふわしい、景観保全の在り方について見つめ直しています。

今後の展望

大谷地区は平成に入り陥没事故が相次ぎ、採石産業に伴う安全対策が求められました。また、海外から安価な石材が輸入されるようになったことも重なり、大谷石の需用は減少を続け、最盛期には二〇〇を超えた採石場も、現在では数か所で稼働するのみで、石材業に携わる人々も年々減少を続けています。

しかしながら、新たな大谷石の需用の拡大を図るため、大谷石に対する研究も進められています。加工技術の発達により容易に独特の意匠を施すことも可能になったほか、特に成分の中に含まれるゼオライトの吸収効果などに着目し、従来のエクステリアからインテリアへと市場を広げています。

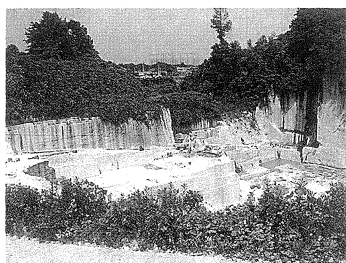
夏には奇岩群や採石場が草木で覆われ景観が隠れてしまうことから、草木を除去する岩出し作業が行われ、秋には地域を紹介するイベントの開催など、石の町大谷の魅力を引き出すような取組も行われています。

現在大谷の再生に向けて、行政、学術経験者、市民団体等が幅広い視点から検討を重ね、古来より人間と石のかかわりによって造られてきた大谷にあふわしい、景観保全の在り方について見つめ直しています。

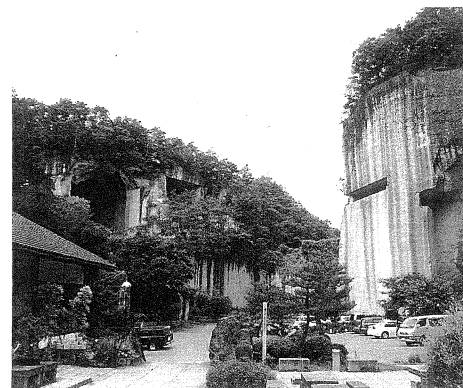
（宇都宮市教育委員会文化課主任 井上俊邦）



採石場跡と農地



稼働中の採石場



採石場跡（大谷資料館）

東京にいちばん近い棚田

鴨川市の西端部に位置する大山地区に所在する「大山千枚田」は農林水産省認定の「日本の棚田百選」の中でも、最も東京に近い例として、近年おおいに注目されています。

全国有数の地すべり地帯

大山千枚田と周囲の里山は、千葉県最高峰の愛宕山（標高四〇八m）の南に位置しています。この地域も含め、長狭平野の南側に東西に連なる嶺岡



稲穂が色づき、実りの秋を迎える大山千枚田

丘陵地帯は全国でも有数の地すべり地帯として知られています。このため平地が極めて少ない嶺岡山周辺では、地すべりによって形成された比較的小規模な斜面を開墾し

て、古くから棚田がさかんに造成されてきたものと考えられています。

この地域の棚田では、自然の地形に沿って土で畦が構成され、耕作に必要な水はすべて天水や湧水に頼る、極めて原始的な形態が保持されています。そのため、水田内や畦などでは、年間をとおして、変化に富んだ貴重な生態系が維持されています。

幕府直轄の牧を支えた村々

嶺岡丘陵地帯は、江戸時代中期の享保年間（八代将軍吉宗によって、馬の放牧場として整備されました。この嶺岡牧は幕府直轄であり、山地を利用している点で、他に類例のないものでした。また、インド産の白牛が放牧され、「酪」と称される乳製品が生産されていたことから、嶺岡牧は日本の酪農発祥の地と位置づけられてもいます。

この嶺岡牧の維持・管理を担っていたのは、近隣の村々の農民でした。土手垣の修理、馬捕りの勢子、狼・山犬狩りの勢子など、記録



千葉県指定名勝「鴨川大山千枚田」と、その東と南に広がる里山の眺望：右側の山が千葉県最高峰の愛宕山。中央から右方向に連なる尾根の周辺一帯は、かつては江戸幕府直轄の「嶺岡西牧」の範囲に含まれていた

軽いものではなかったはずだ。

固定された自然環境と生活

この牧の範囲が土手垣を築くことによって享保のころに確定したことは、別の観点からすれば、これ以降、牧の範囲内を近隣の農民が耕作することができなくなったということです。そのせいか、大山千枚田周辺の村々の石高は記録で見ると、慶長年間から明治初年のころまでの約二五〇年の間ほとんど増減がありません。

この事実からは、嶺岡牧周辺の地域では江戸時代をとおして大規模な新田の開発は行われなかったことがうかがえます。その点は大山千枚田が所在する釜沼と隣接する平塚、北風原の各地区とも同様であり、この地域の自然環境と人々の生活は、自由に開発すること

がままならない幕府直轄の牧の存在によって、ある程度固定されたとも考えられます。

景観を維持してきた人々の営み

こうした状況において、この地域の人々は、嶺岡牧の維持のために必要な労働力を提供しながら、与えられた土地の耕作を何代にもわたって営々と続けてきました。

日常的に発生する畦の崩落や、地すべりなどに対処する一方で、牧の土手垣の修繕も課せられていました。また、水をはじめ生活に必要な諸々のものを調達するために、山林との密接なかわりを保ち続けました。この地域の人々が生活を維持するためにやってきた、さまざまな活動そのものが、地すべり地帯の水田や山林を保全する役割を担っていたと考えられます。

こうした人々の、長年にわたる自然への働きかけの積み重ねこそが、大山千枚田と周囲の里山の景観を形成し、維持してきた最大の要因にほかなりません。

交流の場としての棚田

農業を取り巻く状況がおおいに変化しつつある今日、大山千枚田の存在意義もおのずと変わりつつあるようです。

平地での広い水田に比べると、一枚一枚の面積が狭い棚田での作業効率は格段に低くなります。もともと「長狭米」は江戸時代から良質の米として高い評価を受けていましたが、今日では、米の生産だけで生活を営むことは極めて困難です。そのため近年の大山千枚田は生業の場としての側面が薄れつつありますが、その一方で、地域活性化を促す交流の場としての重要性が広く内外に認識されるようにもなりました。

現在の大山千枚田を維持・管理するうえで、都市住民の参加は不可欠かつ重要な要素になっていますが、この点は「東京にいちばん近い棚田」という特性が十分に生かされています。

文化財としての棚田

大山千枚田は、平成一四年三月に千葉県の指定名勝となり、文化財としての価値づけもなされました。その維持管理を担うNPO法人大山千枚田保存会の地道な取組によって、棚田のもつ文化的価値も、多くの人に認識されるようになってきました。

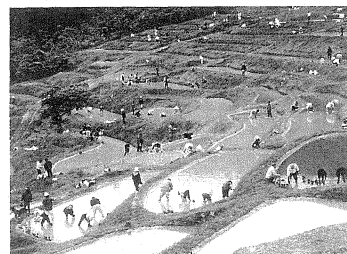
今後はさらに、名勝の指定範囲内のみにとどまらず、有機的な関連性を有する棚田・里山・集落を文化的景観として位置づけ、それらを一体として保存活用すべく、総合的な取組を進めることが望まれます。

（鴨川市教育委員会文化振興課文化財係 石川丈次）

陸軍部測量局（明治15年測量）作製の図面に記録された嶺岡西牧の範囲



大山千枚田は愛宕山の北北西約2kmに位置している



棚田オーナーの参加によって行われる田植え作業

中世絵図がいざなう 農村の原風景

本寺地区の位置と環境

一関市の西端にある栗駒山（標高一六二七m）を源流とする磐井川沿いにいくつかの谷底平野が展開していて、その中の一つに一関市蔵美町の本寺地区があります。JR一ノ関駅からは西へ直線距離でおおよそ一七km、標高一四五〇〜一七九mの水田地帯を中心とする地域です。その本寺地区は昔「骨寺村」と呼ばれ、中世平泉の中尊寺経蔵別当の領地でした。経蔵は、藤原清衡の願いにより作られた『金銀字文書一切経』等、中尊寺経といわれる大切な教典が納められたところです。

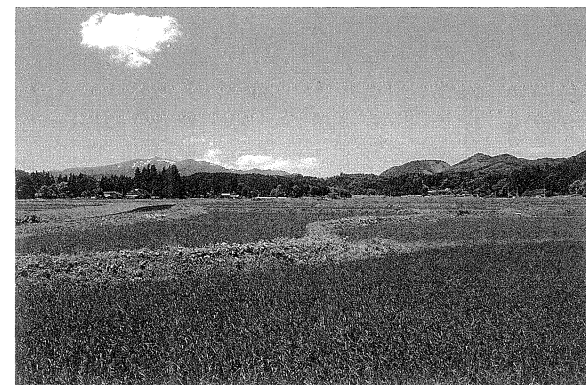
絵図と骨寺村

骨寺村は、中尊寺経蔵別当領として、中尊寺中世文書や鎌倉時代の歴史書である『吾妻鏡』の記述に裏づけられる荘園です。特に、平成七年に国の重要文化財に指定された中尊寺大長寿院に伝わる二枚の絵図には、当時の骨寺村荘園の景観が描かれています。その絵図

の地である本寺地区は、絵図を見ながら、当時ながらの農村風景を今でも感じることのできる良好な環境となっています。平成一七年に歴史的な証左により九か所が国指定史跡となり、平成一八年には重要文化的景観の選定を受けました。

文治五年（一一八九）藤原氏滅亡後、鎌倉幕府からこの地方の支配を任された葛西氏が、ときおり骨寺村荘園に対して狼藉を働くなど領地の侵略があり、たびたび境争いとなつたと伝えられ、そのような経過の中で荘園絵図が書き残されたとされます。

この二枚の絵図は鎌倉時代の作と考えられ、描き方や内容が異なることから便宜上、簡単に描かれた絵図を簡略絵図（仏神絵図）、詳しく描いたほうを詳細絵図（在家絵図）と呼んでいます。簡略絵図の右上の一部と下が欠損していますが、詳細絵図は『吾妻鏡』に示された四方の境「東は鎭懸、西は山王、南は岩井河（磐井川）、北は峯山堂馬坂」の寺領の範囲に磐井川の南の丘陵を加えて表しています。



初夏の本寺

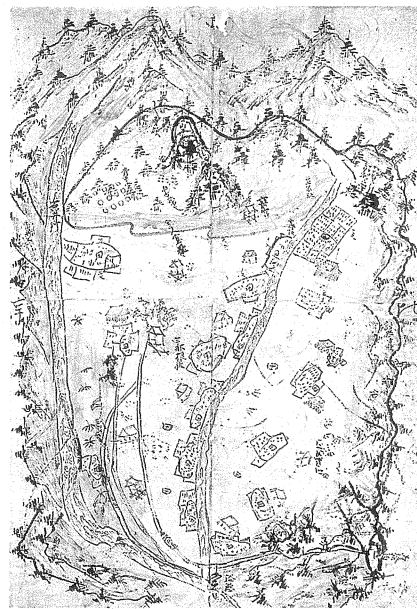
絵図は、山や川、当時の建物等景観的な特徴が、絵による相対的關係で表され、面積や距離は読み取れません。西を上、四辺に目印となるそれぞれの山並風景を描き、社寺や田、在家（屋敷）を描き込み、絵図中央左上には、村名の由来となつたと考えられる骨寺堂跡が描かれています。遠い山と手前の山の書き分けもあり、特に詳細絵図では正面の山は特徴的です。奥は険しく、手前の里山は、太い曲線で北側から東の山並を囲み寺領を示してい

ます。平泉の社寺は浄土思想を背景に形成されたことが藤原清衡の供養願文からもうかがえますが、骨寺村絵図に描かれた宗教施設の配置も、西の霊峰栗駒山を奥に据えて、山王、白山、六所宮が描かれ、北の山並にミタケ堂（金峰山）、不動廟、慈恵塚、平地にはウナネ、若神子社などが描かれており、修験活動を背後に感じます。

中世以来の土地利用

現地本寺に目を移すと、そこは昔から変わらない土地、自然地形に沿った農村の姿が観察できます。骨寺村開拓初期の水田の用水確保は、現在の本寺川（中川・樽山川）と丘陵からの沢水や湧き水で、微地形に沿った用水路網等、今でも変わっていません。

今の景観を形づくっている要因として、気象や地理的な自然環境があります。この地域



重要文化財「陸奥国骨寺絵図」(詳細絵図) 鎌倉・南北朝時代、個人蔵

の冷涼な気候や、強い季節風等の環境に対応するために工夫された居久根といわれる防風林を西に設ける屋敷周りなど、基本的な土地利用状況は微高地や北側の山すそに見られ、土地利用の原形を中世に見ることができそうです。

このように、全国的には平地性の水田は大規模高効率化の圃場になっていく中、この地域は中世以来の自然的条件に適応した散居の居住形態を残しています。

生きた景観への取組

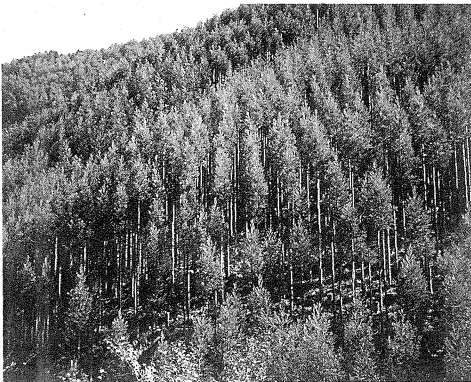
遅い春は、雨や風、大地の熱により急激な雪解けとなつて瞬く間に地肌を表し始めたかと思うと、落のつばみが顔を出し、緑の大地

に変えていきます。慈恵大師拝殿の脇にある種時ザクラが遅咲きの花を咲かせるころ、田植えが始まり、機械植えできなかた場所を人手で植える風景があり、一粒でも多くの米をとという思いが伝わってきます。今この地域では、大規模高効率の圃場整備をした

い思いを抑えて、この文化的な水田地帯を後世に伝えることと農地の効率化とを協調させるべく景観保全農地整備を模索しています。平成一六年から地域づくり推進協議会を発足させ、地域の課題に取り組み、ワークショップを継続して先祖から引き継いだ農村景観、文化的景観の価値を理解し生かしていこうという地域ぐるみの活動は夜遅くまで続くこともあります。少子高齢化や過疎という課題もあります。将来にわたってこの地域の農業が継続できるようにすることが荘園遺跡の保存につながり、地域の人々にはこのことに誇りをもって伝えようとする意識が高まりつつあります。

（一関市教育委員会教育部文化振興課 長補佐

工藤 武）



一本仕立の杉林

杉は、初めから用途が定まっております。樹皮を剥いだそのままの状態が使われます。したがつて青林の段階で、床柱が垂木か、どのような建物で使われるのかなどを想定し、まっすぐで節がなく、細くも太くもない状態に育てる必要があります。そのためには、園芸をほうふつさせるような緻密で手間のかかる生産技術と長年の経験が必要とします。

ところで、モデル事業で調査する過程において、『古都』に描写されている景観は、明治期とは異なっていたであろうことが明らかになりました。

北山杉の林業景觀を特徴づけている要因に、林地の面積の一つづつが小さいという点があ

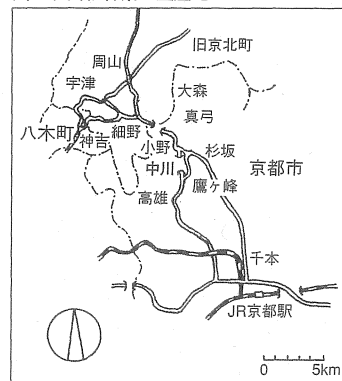
園芸をほうふつさせる
林業が育む景観

川端康成の小説「古都」の舞台として知られる北山杉の林業景観は入念に枝を取り払った杉の細い幹が、急峻な斜面の谷あいには整然と立ち並び、そのこずえには青葉の冠が覆いかぶるという独特な景観が特徴です。

立地条件が育んだ集約的な林業

北山杉を産出する地域は、京都市から若狭湾へと通ずる国道一六二号線を軸とし、栲尾山高山寺近辺から市域北端の旧京北町域に至る。

図 北山杉林業の生産地



る南北およそ三〇kmの範囲に及びます。モデル事業は、そのうち最も古い生産地の一つである中川地区を中心に行われました。

北山杉を生産する集落の多くは、狭隘な山間部にありますが、中でも中川地区では耕作するだけの十分な平地がなかったため、市井で林産物売り、食料などを購入する必要がありました。そこで林業からより効果的な収入をあげるために、一般的な林業労働量の三〜四倍にも達する労働力が必要とされる付加価値の高い集約的な林業が確立してきたものと考えられます。

材木としての北山杉は、和室の床柱や数寄屋建築のひさしの垂木などに用いられます。その木肌は、淡い白さを持ち、磨くことにより深みのある艶を発するという特徴があります。中には、遺伝により表面に縦方向の凸凹をもつ天然紋という品種やそれを模した人工絞りという技法もあります。発祥の時期は定かではあ



台杉仕立の杉

りませんが、文献史料によると一八世紀ごろだと考えられます。なお中川地区は、数寄屋建築の宝庫かつ最大の消費地であつた京都の市街地の近郊に位置します。

北山杉林業の特性

北山杉の育林手法には、台杉仕立と一本仕立があります。台杉仕立とは、地上から約一・五mの位置にある枝を放射状に残し、その上の幹をいったん切り落として、残った数本の枝を新しい立ち木として育てるというものです。この手法だと一本の杉から同時に複数本を収穫することができ、新たに植林をする必要もありません。一方、一本仕立は、苗木を植え付けて育林・伐採した後、再び植え付けるといった一般的な育林手法です。

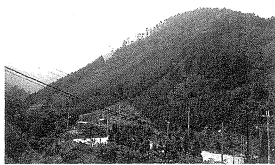
製材が可能な一般の用材とは異なり、北山

ります。かつて北山杉林業では、北山杉だけではなく林業の規模に応じて、スギ・ヒノキ用材林、薪炭林、マツタケ林などといった複数の林産物が収入源とされてきました。そのため、一つの山の中に北山杉、アカマツ、ヒノキ、薪炭林などが小さな林地単位で林立しており、またそれぞれの育林の伐採時期が異なることから、植え付けや伐採が交互に行われ景観が短期間で遷移するのが恒常的な姿でした。こうした多様な樹林の中に、ずっと伸びた北山杉がかいま見えるところに、景観の特性が認識できるのだと考えられます。

住宅用材木の規格化などに伴って北山杉の需要は現在に至るまで縮小しており、林業の経済的基盤は大きく揺らいでいます。また部材の低価格化による収入と維持管理費の不均衡により、林地が放置される傾向にあります。もしこのまま林地に手が入らない状態が続けば、せっかくの特徴的な景観が失われていく恐れがあります。



樹種が混交する山林



樹種が混交する山林

もともと北山杉は台杉仕立が主流でしたが、床柱材の需要拡大に伴い、明治期後半から大正期にかけて台杉より質は劣るものの生育の早い一本仕立へと転換しました。また、昭和三〇年代後半から四〇年代にかけて一般の住宅内に北山杉の床柱が用いられるようになったことにより、需要が急激に拡大しました。併せて一本仕立林が激増した反面、他の林産物の規模は縮小したことから、この時期に景観が単調になっていったようです。

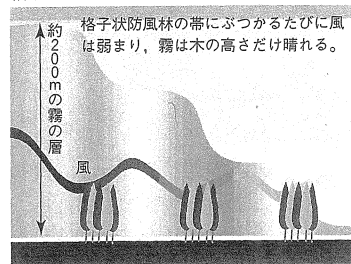
行き詰まる林業と今後の課題

モデル事業において住民意識調査を行ったところ、およそ九割の人々から景観を残したいという回答が得られました。しかし、高度経済成長期以降、住宅における和室の減少や、木造

北山杉林業は、およそ一〇〇年にわたる大造林からの転換期を迎えています。今後、景観を保護していくためには、その成立事情からみて、北山杉の市場性と人手の確保が重要です。また育林技術が極めて特殊であることから、技の継承や伝統的な建築部材の良さをアピールすることが不可欠といえます。生業の継続と景観保護の取組が、まさにこれから始まろうとしているところです。

(京都市文化市民局文化財保護課 今江秀史)

格子状防風林が風や霧を抑えるしくみ



空から見た格子状防風林

格子状防風林の帯にぶつかるたびに風は弱まり、霧は木の高さだけ晴れる。

中標津町は、平成六年に景観形成ガイドプランを策定し、その後に景観条例の制定・都市計画マスタープラン・農村環境計画・緑の基本計画を策定するなど、現在まで、景観保全

中標津町は、平成六年に景観形成ガイドプランを策定し、その後に景観条例の制定・都市計画マスタープラン・農村環境計画・緑の基本計画を策定するなど、現在まで、景観保全

景観に関する取組

格子状防風林と、生業である酪農草地がおりなす複合的かつ雄大なスケールの景観は、地域の人々の生活を支えるだけではなく、まちを訪れる人々にもいやし・潤いを与える、まさに自然と人間のかかわり合いから生まれた文化的景観です。

以上のように「格子状防風林と酪農景観」は、明治以降の開拓区画を基礎として形成されてきたものです。

おり、近年は経営規模が拡大する傾向にあります。

中標津は、住民のたゆまざる努力とたくま

平成一六年度および平成一七年度に実施した文化的景観モデル事業では、格子状防風林をはじめ、酪農景観に関する保存・活用の方策を地域住民の参画を進め、これに基づいて検討しました。その結果、格子状防風林が、生業の変遷とともに生まれ、人々の営みの中で成長してきた過程を裏づける資料が見いだされ、また、市街地と周辺を結ぶ自然の回廊としての役割を担っていることなどがあらためて確認されました。さらに、生業を守り育てている地域の人々が、自らの日々の生活と意思決定の積み重ねによって、景

に対し熱心な取組を展開してきました。格子状防風林に関しては、近年、根釧東部森林管理署によって森林公開講座や国有林の開放事業が実施され、その利用も促進されています。

中標津の格子状防風林の景観は、次世代へ引き継ぎたい北海道の大切な宝物として平成一二年に北海道遺産「根釧台地の格子状防風林」として選定を受けました。選定にともなう北海道遺産ツアーが実施されており、地元では遺産サポーターとしてNPO法人の組織化や講演会、シンポジウムの開催を推進しています。

中標津町の開拓は明治四四年ころから計画的に行われてきましたが、知床連山からの強風が穀物農業に影響を与えるため、開拓区画に基づく約五五〇四方の区画割に加え、約三三〇〇mごとに約一八〇m幅をもつ格子状防風林が形成されました。昭和六・七年には、穀物

文化的景観の特色

中標津町は、北海道の東部、根室管内の中部に位置し、町域は東西約四二km、南北約二七kmに及びます。面積は、六八四・九八km²。北部は千島火山帯につながる丘陵地で、南側に向かって緩やかに傾斜し、平坦な根釧原野が広がっています。内陸性の気候で、夏の平均気温は二〇度前後、冬の平均気温はマイナス一〇度前後。積雪は道内でも少ないほうです。

まちの生い立ち

うっそうたる原生林が生い茂る標津原野には、縄文土器を使った人々からアイヌの人々が長い間生活を営んでいました。

明治三四年に区画開放され、その後、北海道の拓殖計画が進み、大正七年には根室原野は二〇〇戸を突破する移住をみました。ところが、大正末期から昭和初期にかけての世界の経済不況と連年にわたる冷害凶作によって離農者が続出。特に昭和六、七年の大凶作は、移住後まだ日の浅い開拓農民に徹底的な打撃を与え、生活は悲惨を極めました。この冷害凶作を機に、北海道は「根釧原野農業開発五カ年計画」を樹立。これまでの穀物主体から乳牛を主体にした主畜農業に切り替えようとするもので、根室農業は一八〇度の転換が図られました。また、同一二年には国鉄標津線が全線開通して交通の要衝となり、これ

しいエネルギーによってその後の発展はめざましく、分村後わずか三年余の昭和二五年に町政施行を果たし、奥根室の中心地として着実に発展を続けているところです。

格子状防風林ものがたり

北海道中標津町

農業が凶作により大打撃を受けたことをきっかけに、乳牛主体の酪農へと転換が促進されました。昭和四〇年ごろまでには第一次農業構造改善事業が実施され、さらに牧草地が大規模に拡大しました。格子状防風林は、草地を強風から守るだけでなく、草地の適切な保湿や害虫防止の機能があることから、植林が促進され、防風林の格子はよりいっそう明確となりました。



草地と防風林の景観

保存活用計画を考える

中標津の文化的景観の最大の特徴は、それが開拓の歴史で育まれてきた基幹産業がつくり続けてきた点であり、防風林が設置された根拠である農業が作りだした、社会的経済的な発展の歴史で現在も進行形であることです。

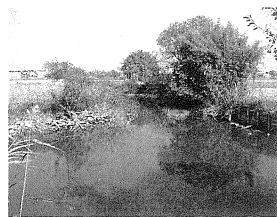
景観というと物理的な要素にばかり意識が捉われがちですが、物理的な要素だけを捉えるのではなく、歴史性を重んじた地域での活動、例えばお祭り、冠婚葬祭などの慣例など、目には見えないが地域をかたちづくる要素もたいへん重要です。このように、生きている産業との調整を図り、物理的な要素だけを保存管理する検討を行うことを避け、できる限り地域の人の意識まで入り込み、中標津の景観の価値を共有したうえで、保存管理計画を検討することとします。

(中標津町役場建設水道部建設課街づくり推進係長 菅野三夫)

水と人との共生

筑紫平野と北原白秋の「水の構圖」

福岡、佐賀両県南部の有明海北部沿岸に広がる筑紫平野は、九州山地から有明海に注ぐ筑後川の河口に開けた扇状地、三角州、干拓地からなります。柳川市は筑後川左岸の河口に面した海拔〇～四mの低地平野に位置しますが、当地域では気候の冷涼化により海岸線が後退し始めた弥生時代から次第に湿地帯が開拓されました。また、国内最大の干潟を有する有明海の最大で五～六mにも及ぶ干満差を利用して、近世から戦後まで精力的な干拓事業が続きました。



見晴らしのいい平地に灌木が並ぶ蒲池地区の掘割

こうして開かれた土地には、農業生産のために灌漑排水用の水路が開削され、生活用水の確保が図られました。

保から貯水や遊水、地下水の涵養までさまざまな機能を併せ持つ水路網が発達しました。現在の柳川市の骨格は、慶長六年（一六〇一）に筑後国三万石の領主として柳川城に入った田中吉政により築かれたものといわれています。

柳川市は、詩人北原白秋をはじめ多くの文化人を輩出しています。今も人の心を打つ彼らの感性には、掘割を満たす水の力が大きく影響しているようです。中央で活躍していた白秋は最晩年に故郷柳川を題材とした写真集『水の構圖』（アルス、一九四三）を企画しましたが、刊行を前に病床から次の序文を寄せました。「水郷柳川こそは、我が生れの里である。この水の柳河こそは、我が詩歌の母體である。この水の構圖この地相にして、はじめて我が體は生じ、我が風は成った」。

掘割と人々の暮らし

豊かな水をもたらした農業生産や日々の暮らしを支える掘割は、受益者によって守られてきました。補修や除草など掘割の維持管理は



柳川城外堀。藩主家の別邸「御花」付近の水際には現在も大型樹木が並び往時の姿がしのばれる。寛政2年の町割図に描かれた掘割の大半が現在も残り、川下り観光に利用されている

共同体の仕事です。農村部では、農閑期には堀を干し上げて、「ゴミ」と呼ぶ浚渫土からつくる堆肥を再び田圃に戻す循環システムがありました。堀干しでは鮒や鯉などの魚を取り、加工して冬場の食料にしました。

一方、旧城下町の市街地では掘割の水は貴重な生活用水でした。このため、掘割の利用には厳しい制限が設けられ、家庭排水は庭先に掘られた「たんぼ」と呼ぶ溜枒に捨て汚水が直接掘割に流れ出さない配慮がなされていました。そして、城堀を流れた水の一部は下流域の農村部を潤しました。

ところが昭和三〇年代以降、状況は一変し

ました。農村部では堀干しの重労働を担う若者が地域を離れ、堆肥は化学肥料に変わり、堀干しはとだえしました。また、人口密集地の旧城下町では、上水道の発達で容易に水が手に入るため、家庭排水を直接掘割に流すようになりました。汚染された堀には次第にゴミが捨てられ水草が繁茂し、荒廃が進みました。昭和五二年、荒廃し臭いを放つ掘割問題解決のため柳川市が出した答えは、川下りコース以外の主な水路はコンクリート張りとし、残りの水路は埋め立てるという計画でした。

掘割再生の取組

この埋立計画を掘割の再生運動へと転換させたのが、当時の柳川市職員で水路埋立計画の担当となった広松伝氏です。広松氏は、「柳川市河川浄化計画」をまとめ埋立計画を撤回させ、翌昭和五三年度から住民参加の浄化運動が展開されました。

住民と行政が一体となった掘割再生の取組は、宮崎駿・高畑勲両氏の映画「柳川掘割物語」（一九八七）で広く紹介され、全国に知られるようになりました。

広松氏は掘割再生運動が結果を出した後も、研究会を設立して水系全域に活動を広げるなど水環境問題の解決に取り組みました。平成一四年に急逝された後も広松氏の意思は引き継がれ、市民団体「水の会」では、掘割の清



圃場整備が入らず先人から受け継いだ姿をよく残している蒲池地区の掘割



現在は掘割について学ぶ体験行事として行われている堀干し祭

掃活動をはじめ、水源に近い水系上流域での植樹活動や子どもたちの相互交流などを行い市民による掘割再生運動をリードしています。

文化的景観としての柳川の水体系

柳川市における文化的景観は、有明海沿岸の低地平野において、人々が弥生時代以来築いてきた水路と自然河川がつくる水系・景観地で構成する水郷景観の「広がり・連続性」に特徴があります。生きるために海に向かい土地を拓いてきた柳川人の歴史そのものです。生活様式の変化や公共事業などを反映して、現在も景観は変化し続けています。

これからの水と人のかかわり

地域に暮らす私たちは、農業や川下り観光

人と水とのかかわりには、地域に暮らす人々が、掘割から受ける恩恵と同じだけ、掘割を維持する「わづらわしさ」を受け入ることが必要ではないでしょうか。

掘割の再生から三〇年がたち、市民の間には水を守る意識がよみがえりました。現在には住民が理念を育て、行政がシステムティックに補修や整備を担っていますが、お互いの距離が少し開いています。今後は、まちづくりや景観保護の取組を通じて、共通の目的のもとで地域と行政とがともに掘割再生に必要な役割を担う、総合的な体制づくりが望まれます。

そして、柳川の大切な文化的景観が、これからも地域のみずみずしい感性を育んでくれることを願います。

（柳川市教育委員会教育部生涯学習課 文化係主任技師／学芸員 堤 伴治）

佐賀県唐津市

「手間講」が息づく棚田

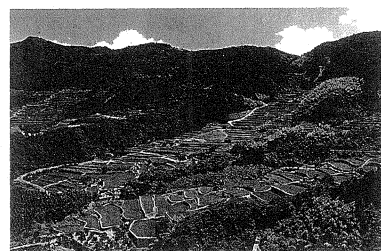
春は黄色、夏は緑、秋は黄金色。
一面の菜の花、水面に映る早苗、風にそよぐ稲穂。

「蔵野の棚田」は、季節ごとに、さまざまな色に彩られます。

急斜面に築かれた千枚田

九州の西北部に位置し、北側が玄界灘に面する佐賀県唐津市。この唐津市の南端、相知町の蔵野地区に「蔵野の棚田」は位置します。標高七六四mの八幡岳の北麓、「大平」「石盛」「南川原」「下ノ木場」「九郎谷」の字をもつ五つの小さな谷に沿って、約四〇ha、約一〇五〇枚もの棚田が築かれています。棚田は、平均傾斜四分の一という急斜面の、標高一八〇m付近から、四二〇m付近にまで広がり、その標高差は約一四〇mにも及びます。

蔵野地区の世帯数は六十余戸、農家数五十余戸で、このうち販売農家数は四十余戸。このほとんどが兼業農家で、専業農家はわずかに数戸を数えるのみです。また、耕作面積が



急斜面に築かれた棚田

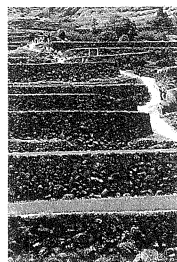
で営まれてきた大きな要因として、「手間講」と呼ばれる協働の精神が挙げられます。

「手間講」が息づく里

蔵野の棚田の石積みは、その多くが「野面積み」と呼ばれる自然石をほとんど加工せず、積み重ねて造られています。これらの石積みは、専門の石工によって積み上げられたものではなく、「石垣棟梁」と呼ばれる現場の指

揮者と農民の共同作業で築かれました。このような農村社会の「結」を蔵野では「手間講」と呼び、地区の生活や生業のあらゆる面で大きな役割を果たしてきました。

「手間講」は決して古き良き時代の風習ではなく、ここ蔵野地区では現代まで脈々と受け継がれています。平成八年には、地区の中堅グループである「ふる里会」を中心とした「住みよい蔵野を考える会」が開催され、住民に対するアンケート結果に基づき、住みよい蔵野づくりマップが作成されました。平成九年には、「ふる里会」とJA青年部が都市部の消費者を迎え、「農業体験ツアー」を実施。このイベントで、棚田景観のすばらしさ、清らかな水が育んだ棚田米のおいしさが、外部の人々の好評を得たことが、その後の活動をさらに広げる原動力となりました。平成一〇年からは、休耕田や刈入れ後の田んぼに菜の花やれんげなどの景観形成作物の栽培を増やすことで、棚田全体の景観向上にも取り組み始めました。さらに平成一二年には「蔵野棚田実行委員会」が組織され、イベントの企画、運営を組織的に実行する体制ができあがり、やがてその輪は周囲の四つ



野面積みの石垣

の地区にも広がり、「棚田と菜の花フェスティバル実行委員会」へと発展しました。

都市部との交流を生むイベントの開催

このような地元の強い結びつきを下敷きに、これまでもさまざまな地元主催のイベントが実施されてきました。とりわけ「蔵野棚田実行委員会」が組織された後は、従来までの農作業体験型のイベントだけではなく、新たな企画への挑戦も試みられました。平成一三年には、県内外から約一〇〇〇名の参加者を得た「早苗と棚田ウォーキング」を開催。会場では、棚田米の予約販売、農産物・加工品の直売を行い、参加者と生産者との顔の見える交流が



大好評を博した「菜の花レストラン」

好評を博しました。同年一〇月には「菜の花種まき交流会と棚田発見塾」を開催し、翌年三月には、まいた菜の花が咲き誇る中に大テントを設営し、一流のシェフを迎え「菜の花レストラン」を開催しました。

現代版「手間講」

しかしながら、蔵野地区でも高齢化、後継者不足の問題は例外ではなく、特に農道の整備が遅れた地域を中心に耕作放棄地が増加し始めています。「手間講」精神だけでは補いきれないこうした状況を打破するため、旧相知町は耕作放棄地の活用を柱とした棚田の保全を目指し、佐賀大学農学部と地域交流協定を結びました。これにより、学生、地元住民、市民のボランティアからなる「棚田援農隊」が結成されました。棚田援農隊は、耕作放棄地を田んぼに復元する作業を行ったり、有機・無農薬栽培の実験、新しい作物の栽培実験などを行っています。

また、地元の生産者も、組織的に棚田米を栽培するために「蔵野棚田保存会」を結成し、品質重視の米づくりを目指して、いち早く新品種「夢しずく」の栽培を開始しました。保存会では、パッケージ・チラシの作成、販路を確保するためのセールス、クレームへの対応といったこれまで未体験の業務を主体となっており、さらに、棚田米の販路拡大のた

めに、佐賀市内のデパートやホテルへの働きかけ、町の農産物直売所やイベントへの出品などをおして、郵便振替による産地直送方式も確立させました。



秋の収穫風景

棚田の保存に向けて

このように、蔵野地区では、「手間講」という協働精神を基盤にして、他地域との交流を深めることで、普段から見慣れた棚田がたいへん価値のあるものと再認識し、あらためて棚田を保護しようという意識が強まりました。棚田を保護しつつ、この地で農業を続けていくために、さまざまなアイデアも実行に移してきました。それでもなお、後継者不足問題や、耕作放棄地の増加は今後も深刻な問題となっています。今年度より実施している「蔵野の棚田保存管理計画策定事業」では、地元、有識者、行政の三者によって、こうした課題を一つずつ解決することで、営農の継続こそが棚田景観の保全につながるという認識のもと、蔵野の棚田景観を後世に残すべく知恵をしばっているところです。

(唐津市教育委員会文化課 草場誠司)

ミヅのまちやま

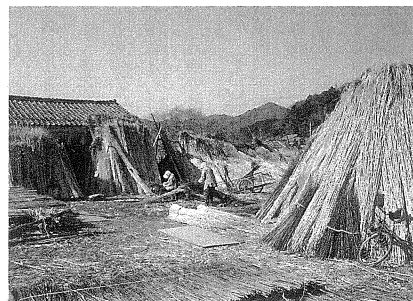
重要文化的景観第一号 「近江八幡の水郷」

人の背丈より高く育ったヨシ、その中にいると、初めてこの地を訪れた人は「日本にこんな所があったのだろうか?」と思うときがあるようですが、否、これこそ今は失われた日本の原風景なのです。

近江八幡市は滋賀県の中部、琵琶湖の東岸に位置し、人口約六万九〇〇〇人の都市です。平成一八年一月一六日に重要文化的景観第一号として選定された「近江八幡の水郷」は地域の北部に位置し、ここでは連綿と受け継がれて



上空から見た「近江八幡の水郷」【撮影：寿福 滋氏】



刈り取ったヨシを乾燥させる

きた生業―ヨシ産業・農業・漁業―に特有の風景を今も見ることが出来ます。夏場にこの地を訪れると、青々と生い茂ったヨシが目を引きまします。舟に乗れば、魚を捕る伝統的な漁具が沈んでいるのを見ることが出来るでしょう。ヨシは秋になると段々と黄金色になっていきますが、そのとき運が良ければ、非常に珍しい風景を見ることが出来るかもしれません。

ヨシ地の中を観光船が通るのはよくあることですが、「権座地区」と呼ばれる島状の水田付近では、農機具や収穫された稲を積んだ田舟が航行しているという、かつてはどこでも見られたが今はどこにもない風景が展開されます。冬には、見上げるほどに成長した黄金色のヨシは刈り取られ、作業場で円錐状に立てられていくのが目につきます。刈り終わつた後のヨシ地には火が入られ、そのあと新しいヨシが芽生えます。

このような生活様式を今も継続していることが、地域の誇りであり、重要文化的景観の選定理由でもあります。近江八幡市には、万葉集で「葦刈に 堀江漕ぐなる 櫓の音は 大宮人の みな聞くまでに (大伴池主)」と詠まれた風景が今も残っているのです。そのため、映画やドラマのロケに使われることもしばしばです。皆さんも知らず知らずのうちに水郷地帯を目にしているのではないのでしょうか。

市民の手による風景づくり

近江八幡市の景観行政の取組は、羽柴秀次が八幡の町を建設すると同時に琵琶湖と町を結ぶ運河として開削した八幡堀を守る運動から始まりました。昭和四〇年代、自動車社会の到来とともに、八幡堀はかつての機能を失い、ゴミ捨て場と化し、埋め立てられようとしていました。しかし、そのとき「堀は埋めた瞬間から後悔が始まる」を合い言葉に保存修景を求める市民運動が起こり、行政を動かした結果、八幡堀は八幡商人の精神を今に伝えるシンボルとしてみごとによりがえりました。ここから始まった市民運動は、八幡商人の町並を保存する運動へと発展し、平成三年の重要伝統的建造物群保存地区の選定につながります。さらには、圃場整備や治水計画により水郷地帯の風景が消えそうになったときにも同じように自然発生的に起こった市民運動が行政を動かし、保存に向かいました。幾度となく行われた市民による風景を守るための運動が景観法による景観計画策定や重要文化的景観選定の素地となっています。

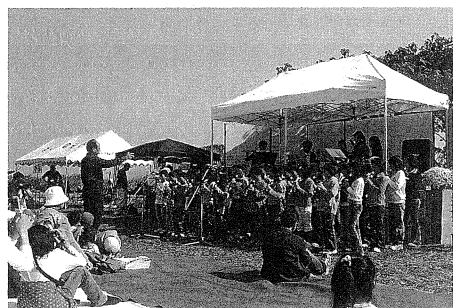
このような市民運動が起こった背景には、江戸時代に八幡堀の浚渫を行っていた町人の自治組織「駄別仲間」の精神が生きています。我々はこの精神を誇りとし、継承していかなければならないと強く感じています。

未来へ引き継ぐために

重要文化的景観に選定されてから、近江八幡市では、平成一八年度、それに関連したさまざまな取組を官・民を問わず行ってきました。七月には文化的景観保護の精神を全国的に共有すべく、岩手県一関市・滋賀県高島市・愛媛県宇和島市とともに発起人となり、「全国文化的景観地区連絡協議会」を近江八幡市に



「近江八幡の水郷」船上見学会



権座水郷コンサート

において設立しました。また、八月には市内の小学校六年生を対象に「重要文化的景観『近江八幡の水郷』船上見学会」を行いました。これは、次の時代を担う子どもたちに自分たちのふるさとのすばらしさを知ってもらおうという試みであり、約一六〇人が参加しました。

民間では、文化・芸術の視点から水郷を捉えた行事が行われました。その一つが、水郷地帯や八幡堀を描いた秀作ばかりを集めた「水郷風景を描く絵画秀作展」であり、一月に行われた「権座水郷コンサート」でした。これについては、小学生と日本テレマン協会ターフェル・クインテットとの共演や、旭堂南左衛門氏らと幼稚園児による3D講談を中心とし

て、ヨシ細工、田舟漕ぎ、西の湖の漁体験などのワークショップを行い、水郷地帯の文化の継承に多大な効果を上げたといえます。

このように私たちのふるさとに誇りをもつことを目標に、さまざまな試みが行

われましたが、選定直後という一過性のブームに終わらないよう、継続していかねばなりません。また、重要文化的景観の核となるヨシ地の荒廃が非常に目につき、ヨシ産業自体も後継者問題などから、衰退が危惧されています。選定地区の集落内には、修理・修景を行わなければならない箇所も数多くあります。今後は、現状に甘んじることなく、ヨシ地保全、修理・修景事業や啓発行事などハード・ソフトの両面からこの唯一無二の風景を今よりもすばらしい状態で次世代へと残していきたいと考えています。

(近江八幡市文化政策部文化振興課主事 川村力広)

なぜ文化的景観を保護するのか

沖縄県竹富島

竹富島へはふつう、まず空路石垣空港へ向かう。東京から約三時間、大阪から約二時間



写真1 竹富島の集落内の道路と生垣・石垣

半です。石垣市の港から、高速船でわずか一〇分ほどで竹富島に着きます。竹富島は八重山諸島の一つで、石垣島の西南に位置します。琉球石灰岩でできた低い小さな島で、面積は

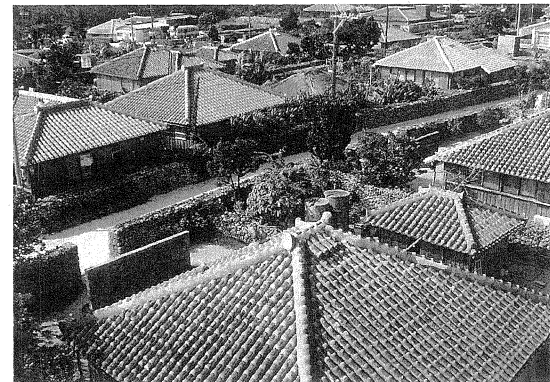


写真2 竹富島の赤瓦葺民家群

約五・四kmに過ぎません。

周囲を珊瑚礁に囲まれた、亜熱帯の濃い緑のほぼ中央に、東、西、仲筋の三つの集落があります。集落の中に入ると、道には白砂が厚く敷きつめられており、両側には珊瑚石灰岩を積みあげた一五〇cmほどの石垣があり、石垣沿いにフクギが植えられていたり、石垣をブーゲンビリアの鮮やかな赤が彩っている(写真1)。観光客を乗せた車が、水牛に引かれてゆったりと歩んでいる光景に出会えます。

石垣で囲まれた屋敷の中には、平屋で板張り、また板雨戸をめぐるせた建物と、前庭および紫芋の畑などの菜園があります。建物は、琉球赤瓦をしつこく塗り込めた軒の深い屋根が特徴的です(写真2)。居室と寝室のある主屋と炊事棟のトウラがあるのが普通で、主屋の屋根にはしばしばシーサーが乗っています。

竹富島の集落は、一九八七年から、国の重要伝統的建造物群保存地区として選定され、保護されています。現在は多くの人々がこの島を訪れ、八重山の自然と、八重山らしい文化的景観を堪能しています。竹富島の人々は、この美しい文化的景観を守り、育てるために多大な努力を続けてきました。

直接のきっかけは、一九七〇年ごろに外部の資本が島の土地を買い占めたことに対し、島を守ろうとした運動にあったとされています。当時、一五年間ほどの間に人口が三分の一以

下となっていた苦難の時期でもありました。それから約半世紀の強い運動の結果、「美しい島」を誇るべきふるさとを活力あるものとして後世へと引き継いでいくために、一九八六年に住民の総意により「竹富島憲章」が制定されました。「土地を」売らない、汚さない、「美観を」乱さない、「集落景観、美しい自然を」壊さない、「伝統的祭行事を」生かすの五原則が基本理念として掲げられ、五か条にわたってその実施法を定めています。現在も、島の人々の委員会がその実施に努力を続け、その結果、美しい文化的景観が保護され、人々がそれを楽しむことができるようになっていっているのです。

英国コッツウォルズ

ロンドンから西北西へ二二〇kmほど行ったところにある丘陵地帯は、ザ・コッツウォルズ(The Cotswolds、以下日本での通称に従い「コッツウォルズ」と呼ばれています。中世から牧羊地帯であったところで、いくつもの羊毛取引の町が成立しました。地元産の淡いページュあるいは灰色の石灰岩でできた民家がこの地域の特徴であり、最もイングリッド的な村として、世界各国から訪れる多くの観光客を楽しませています。

コッツウォルズでは、産業革命に伴う羊毛の大量輸入の時代に入り、牧羊が産業としての競争力を失って衰退し、石造の民家からな



写真3 バイビュリーの石造民家群

る集落の景観も暗く印象のよくないものと思われるようになっていました。長い沈滞のあと、一九三〇年代初頭に至って、この伝統的な景観が、イングリッドらしい美しいものと再評価されて初めて、今日の状況に向かったのです。その中心人物であったウィリアム・モリス(William Morris)は、とりわけバイビュリー(Bibury)をイングリッドで最も美しい村と表現しました。

コッツウォルズの文化的景観の保護は、地区政府の地域計画(Cotswold District Local Plan

文化的景観の意義

竹富島やコッツウォルズの景観は、それぞれの地域の自然環境や立地条件を基礎とし、社会的、経済的条件のもとで形成されたものであり、好ましい文化的景観の典型的な例です。これらの文化的景観はそれぞれの地域の状況に応じて形成されたものですが、ともすれば世界を席巻する近代文明に飲み込まれ、大きく損なわれるおそれの高いものです。しかし、それぞれの地域にとっては、その地域の特性を最も良く発揮したもので、現在の人々にとってはもとより、将来の世代にとってもかけがえのない資産です。それを損なうことなく大切に扱い、次世代に遺すこと、持続的に活用することを目指すのが文化的景観保護の大きな意義です。竹富島では「竹富島憲章」のもとで町民各層の代表者からなる「町なみ委員会」が、コッツウォルズでは地域計画に基づいて地区政府の計画委員会

がその維持のための具体的手続きを管理・調整しています。(京都大学文学部教授 金田章裕)